

「福音に生かされた生活」

(ローマ12・9～21)

きよこのメッセージにアウトラインはありません。個々の聖句に聴いてまいりたいと思います。

9節をご覧ください。〈愛には偽りがあつてはなりません。〉とあります。

〈愛〉は「アガペー」で、主イエス・キリストによってあらわされた愛です。

〈愛には偽りがあつてはなりません〉

の元のことばの意味は「愛は演技をしない」です。それができるためには、「罪」という神から離れている性質から解放されて、その人が新しい人に造り変えられなければ不可能です。後半に〈悪を憎み、善から離れないようにしなさい。〉と語られています。〈悪〉とは、神に喜ばれないことすべてです。そういう〈悪を憎み〉なさい、と語られています。〈悪を憎み〉(なさい)ですから、その人の意志が反映されています。神に喜ばれないことは、徹底して憎む。これが、神がキリストにあつて、私共教会員に求めておられることです。もう一つ、〈善から離れないようにしなさい〉と語られています。〈善〉とは、神のみこころのことです。〈離れない〉は、くっついていることです。

続いて10節です。〈兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。〉とあります。相手がいい人だから愛するのではなく、自分にとっていい人に見えない場合でも愛しなさいという意味です。しかも「互いに」ですから、このことばだけを聞いて守るのは、むずかしいです。後半を先に読んだほうが、分かりやすいです。すなわち、〈互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい〉です。主イエス・キリストを信じますと、ある人だけが優れていて、自分はダメな人間だとは思わなくなりません。

11節です。〈勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。〉とあります。この聖句は、〈勤勉で怠らず、霊に燃え〉までを一気に読まないで、誤解を招きます。主イエス・キリストを信じた者が勤勉、且つ怠惰にならないのは、霊に燃えている限り可能です。〈霊に燃え〉とは、聖霊によって燃えることです。聖霊は神ご自身で、キリストを信じる者の内に住まわれ、私共を燃やすお方です。

12節です。〈望みを抱いて喜び、苦難に耐え、ひたすら祈りなさい。〉とあります。この世に生を享けた人には、一人残らず苦難に遭います。ですが、キリストを信じますと希望がもたらされ、喜

びが与えられます。望みと喜びを、賜物として授けてくださったからです。なお、後半の〈ひたすら祈りなさい〉ですが、主イエス・キリストを信じている人は、私共の内に住まわった御霊によって、絶えず祈っています。「みこころが成りますように」と。

13節です。〈聖徒たちの必要をともし満たし、努めて人をもてなさない。〉とあります。〈聖徒たち〉とは、キリストを信じた人たちのことであると思われま。当時は、信じた途端に「外国人」として蔑視されました。後半に〈努めて人をもてなさない。〉とあります。

〈人〉と訳されたことばは「旅人」です。「旅人」とは、ふらりと訪ねて来て「泊めてくれますか？」という人ではなく、キリストの福音を証して旅をしている人のことと思われま。

14節です。〈あなたがたを迫害する者たちを祝福しなさい。祝福すべきであつて、呪つてはいけません。〉とあります。迫害する人は、そつすることが正しいと思つてしています。迫害に遭つたら、「その人はそれが正しいと思つてやっているのだ」と受け止め、〈祝福すべきであつて、呪つてはいけません〉。そうですと、パウロのような人も起こされてまいります。

15節です。〈喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい。〉とあります。〈喜んでいる者たちとともに喜び〉は、〈泣いている者たちとともに泣きなさい〉よりもむずかしいです。ですがパウロは、〈喜んでいる者たちとともに喜び〉を先に挙げています。このことばは、別の聖句を以て意味を受け取る必要があります。それは、14節の〈祝福しなさい〉です。〈喜んでいる者たちとともに喜び〉はむずかしいですが、〈祝福しなさい〉ならできますし、聖書が語っている趣旨に合っています。

16節です。〈互いに一つ心になり、思ひ上がることなく、むしろ身分の低い人たちと交わりなさい。自分を知恵のある者と考えるてはいけません。〉とあります。一つの心、一つの思いとは、何でしょうか。前後関係から判断するならば、11章においてパウロは、ローマの教会に属する人々が思い上がり、神はイスラエルを退け、自分たちに目を留められたと考えていたことが語られています。それに対してパウロは、まちがいを指摘し、「思い上がつてはならない」と語りました。私共には当てはめるなら、主イエス・キリストを信じることは、自分勝手に信じてはならないことです。二カイヤ信条や使徒信条で語られていることばは重たいです。